

# 徳永古墳群 5

－徳永古墳群H群第4次調査報告書－

2008

福岡市教育委員会

# 徳永古墳群 5

—徳永古墳群H群第4次調査報告書—



平成 20 年  
福岡市教育委員会

## 序

福岡市は、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。本市は原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が残っています。このため、先人たちの足跡である埋蔵文化財の保護に努めております。

今回報告いたしますのは、福岡市の西部、今宿平野を望む丘陵上に立地する徳永古墳群の発掘調査記録です。

今後、本書および調査資料が学術研究だけにとどまらず、市民各位の埋蔵文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり全面的にご協力いただいた地権者をはじめ、御支援と御指導をいただいた関係各位に対し深く感謝いたします。

平成 20 年 3 月 17 日

福岡市教育委員会

教育長 山田裕嗣

### 凡　　例

1. 本書は福岡市教育委員会が福岡市西区大字徳永字アラク384-19・41の個人所有地内において、2002年度（平成14年度）に実施した徳永古墳群II群第11号墳・13号墳の2基の発掘調査報告書である。徳永古墳群調査においては第4次調査にあたる。
2. 本書における調査の細目は次のとおりである。
3. 方位は磁北で、真北に対して6°18'西偏する。
4. 本書の遺物・遺構の撮影および遺構の実測は瀬本正志、遺物の実測は柳原俊行、繪本、トレースは末次由紀恵・瀬本がねこたつた。
5. 本書の執筆・編集は瀬本正志が担当し、編集作業において中間千衣子の協力を受けた。
6. 発掘調査に係る遺物・記載額のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

遺跡名	調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地	面積	調査期間
徳永古墳群II群	4次	0222	TKK-4	西区大字徳永字アラク384-19・41	249m <sup>2</sup> (古墳2基)	2002.6.14～2002.8.29

## 本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
	1. 調査に至る経過	1
	2. 調査の組織	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と歴史的環境	3
	1. 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第Ⅲ章	調査の記録	6
	1. 位置と現状	6
	2. 調査の概要	6
	3. 11号墳の構造と遺物	7
	4. 13号墳の構造と遺物	16
第Ⅳ章	小結	19

## 挿図目次

Fig. 1 調査地位置図(1/200,000)	1	Fig. 9 11号墳石室側壁断面図(1/40)	11
Fig. 2 調査地周辺古墳分布図(1/25,000)	4	Fig. 10 11号墳石室実測図(1/40)	12
Fig. 3 徳永古墳群分布図(1/8,000)	5	Fig. 11 11号墳閉塞施設実測図(1/40)	13
Fig. 4 調査地周辺地形図(1/300)	6	Fig. 12 11号墳葬道部出土遺物実測図(1/3)	17
Fig. 5 11号墳現況地形図(1/100)	7	Fig. 13 11号墳丘出土遺物実測図(1/3)	17
Fig. 6 11号墳丘山並み図(1/100)	8	Fig. 14 11号墳丘断面出土遺物実測図(1/3)	17
Fig. 7 11号墳丘遺存図(1/100)	9	Fig. 15 11号墳石室内出土遺物実測図(1/2)	17
Fig. 8 11号墳丘土層図(1/50)	10	Fig. 16 11号墳丘出土遺物(1/1)	17
		Fig. 17 11号墳丘出土石器実測図(1/1・1/2)	18

## 図版目次

PL. 1 調査地周辺航空写真(1975年 昭和50年)	PL. 8 (1) 11号墳玄室全景(南から)
PL. 2 調査地周辺航空写真(2001年 平成13年)	(2) 11号墳玄室奥壁残存状況(南から)
PL. 3 (1) 11号墳調査前全景(北から)	(3) 11号墳玄室北壁残存状況(北から)
(2) 11号墳丘遺存状況(北から)	(4) 11号墳玄室西側壁北半部残存状況(東から)
(3) 11号墳丘跡去後全景(北から)	(5) 11号墳玄室西側壁南半部残存状況(東から)
PL. 4 (1) 11号墳丘北壁遺存状況(西から)	(6) 11号墳玄室東側壁北半部残存状況(西から)
(2) 11号墳丘西壁遺存状況(南から)	(7) 11号墳玄室東側壁南半部残存状況(西から)
(3) 11号墳丘東壁遺存状況(南から)	PL. 9 (1) 11号墳丘外縁石積断面図(西から)
PL. 5 (1) 11号墳玄門部開塞状況(北から)	(2) 11号墳丘北外縁石積遺存状況(北から)
(2) 11号墳玄門部開塞状況(西から)	(3) 11号墳丘北外縁石積遺存状況(北から)
PL. 6 (1) 11号墳鏡道下部開塞状況(南から)	(4) 11号墳丘東外縁石積遺存状況(東から)
(2) 11号墳鏡道下部開塞状況(南から)	(5) 11号墳丘東外縁石積遺存状況(東から)
(3) 11号墳鏡道全景(南から)	(6) 11号墳丘東外縁石積遺存状況(東から)
PL. 7 (1) 11号墳主体部完剥状況(南から)	(7) 11号墳丘東外縁石積遺存状況(東から)
(2) 11号墳主体部完剥状況(西から)	PL. 10 (1) 11号墳丘外縁石積基礎部遺存状況(東から)
(3) 11号墳主体部完剥状況(東から)	(2) 11号墳丘外縁石積基礎部遺存状況(東から)
(4) 11号墳主体部完剥状況(北から)	

## 第Ⅰ章 はじめに

### 1. 発掘調査に至る経緯

2002年(平成14年)1月17日、土地所有者の毛利ミチ子氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課へ福岡市西区大学徳永字アラク384-19、384-41地内における開墾による土木工事計画に先立つ埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。翌日の同年1月18日付で、毛利喜美男氏から同地開墾の説明と同教育委員会による発掘調査の依頼が記された願書も提出された。埋蔵文化財課は、同申請書を同年1月17日に受理、同月21日に書類審査を行い、当該地が周船寺丘陵山麓に位置する埋蔵文化財包蔵地域の徳永古墳群11号墳および13号墳が登録されている範囲内であることから現地踏査を行うこととし、同年1月31日に申請地において遺跡(古墳)の遺存状況調査を行った。申請地には遺跡分布地図に記されたとおりに2基(11号墳・13号墳)の円墳が残存し、11号墳は墳丘の中央部が陥没していることから石室上部が欠失していることが想定されたものの墳丘全体としては原だった変形が認められないことから築造時の状況を残していること、13号墳は墳丘の一部を残すのみで石室の主体部を含めた大半が欠失している事を確認した。このため、計画されている開発事業が実施された場合には遺跡に影響が出ることが明確となった。

これらの現地踏査結果を依頼者に回答するとともに文化財の取り扱いについて協議を行った結果、埋蔵文化財発掘調査を開墾工事に先立って実施し、発掘調査にかかる費用については国庫補助事業とすることを決定した。発掘調査は平成14年度、資料整理は平成19年度に実施した。

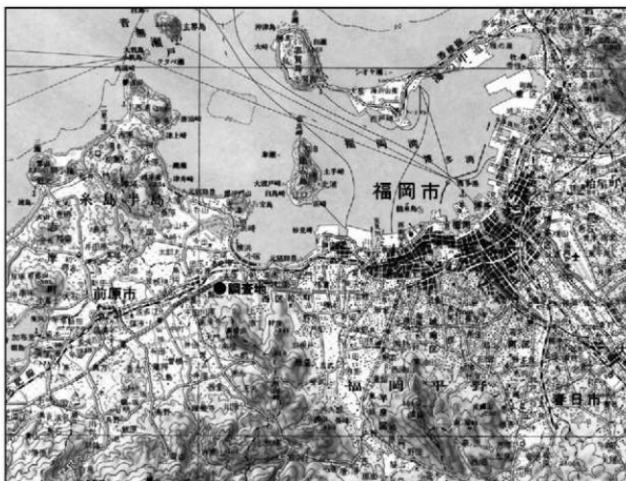


Fig. 1 調査地位置図(1/200,000)

## 2. 調査の組織

(1) 調査主体 福岡市教育委員会

【平成14年度調査時】

教育長 生田征生

文化財部長 球徹

埋蔵文化財課長 山崎純男

調査担当 薩本正志(埋蔵文化財課)

(調査補助) 上野裕子 末次由起恵 長浦美美子 中間千衣子 中村智子 持原良子 山野祥子

(調査協力) 石川正志 犬童陽子 久保靖夫 柴田シズノ 末松美佐子 徳安勝也 中村弘太  
西田マキ工 平野松實 深見佳子 森友ナカ

【平成19年度整理時】

教育長 山田裕嗣

文化財部長 矢野三津夫

埋蔵文化財第2課長 力武卓治

整理担当 薩本正志(福岡市埋蔵文化財センター)

(整理協力) 上野裕子 横原俊行 末次由起恵 中間千衣子 山野祥子



調査地遠景(北から)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

### 1. 遺跡の地理的・歴史的環境<sup>\*1</sup>

徳永古墳群H群は、今宿平野の西部、福岡市西区大字徳永字アラタ、下引地及び大字女原字上谷、浅ヶ谷、丸尾にまたがって所在する総基數27基からなる古墳時代後期を中心とする円墳群である。

今宿平野は、東が長垂丘陵によって早良平野と、西は瑞梅寺川によって糸島平野と面される東西約3kmの範囲に広がっている。北は、長垂から今山の間に形成された砂嘴を北限とし、今津千瀬を介して糸島半島と接している。砂丘の後背湿地は、近世の干拓によって現在見られるような田園地帯が広がっているが、かつては西側に入江が深く浸入していたことが分かっている。平野東部の叶岳(標高339.5m)と高祖山の間に、狭隘な扇状地が形成されているが、概して平野は非常に狭小である。

平野内の弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡は、その立地から、砂丘上、平野東部の扇状地、高祖山北麓の丘陵上先端部の3種類に大別される。

砂丘上の遺跡としては、今宿遺跡がある。弥生時代前期の斐桜墓群や古墳時代の製塙土器、滑石製魚鱗等が相当量出土している。また、砂丘の先端にある今山遺跡は、玄武岩製石斧製作跡として学史的にも登場する著名な遺跡である。沖積地の遺跡としては、今宿平野の拠点的集落と考えられる今宿五郎江遺跡があり、弥生時代後期の大溝から多量の土器や木製品のほか、小銅鐸などが出土している。

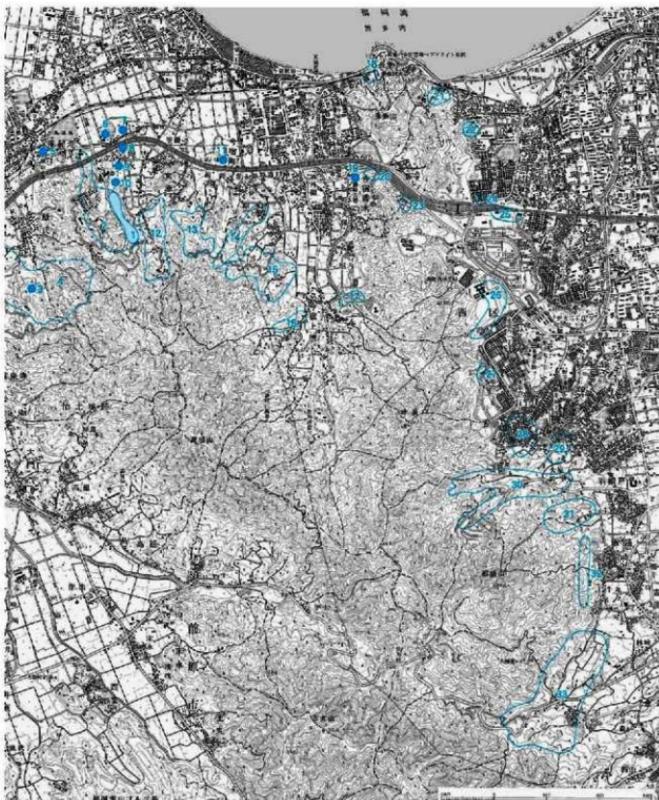
丘陵先端部に位置する遺跡としては、大塚遺跡、女原遺跡、徳永遺跡などがある。このうち、徳永遺跡では6～7世紀の堅穴住居跡が検出されており、本古墳群の被葬者との関連が想定されるが、規模は大きくなない。また、古代の包含層からは越州窯青磁、綠釉陶器などの官街的遺物が出土しており、大宰府鴻臚館の関連施設である主船司との関係が論議されたが、明確な道筋は検出されなかった。

今回調査を行った徳永古墳群H群は、1970年、福岡県教育委員会によって「徳永アラタ古墳群」として確認されたが、1978年に実施された本市教育委員会の分布調査により、現在「徳永古墳群H群」として登録されている。徳永古墳群は、A～H群の8群41基からなり、徳永古墳群を形成する一支群である。またこれら支群中、H群は最大の規模である。本古墳群は、農地や植林地の造成に伴い、今回の調査地点を含めてこれまで5次にわたる発掘調査が実施してきた。このうち18基は現在消滅している。また徳永古墳群は、広義の今宿古墳群を形成する一支群であり、群中最も西側に位置する支群である。

今宿古墳群は、高祖山(419.5m)北麓の小河川によって八手状に開析された標高10～120m付近の小丘陵上に分布している。総基數は現在のところ約320基が確認されており、その立地から13～15の支群に分けられている。

また、今宿古墳群中の前方後円墳は、現在13基が確認されている。古墳群では4世紀中葉から6世紀前半までの首長墓系譜を辿ることができ、山ノ鼻1号墳—若八幡古墳—崎先古墳—丸屋山古墳—山ノ鼻2号墳—今宿大塚古墳—下谷古墳—飯氏2号古墳といった編年が組まれている。これらはすべてすべて丘陵の先端部に立地しているのに対し、恩納原C-14号墳、上谷B-1号墳、本村A-1号墳、飯氏B-14号墳は群衆墳の中に混在しており、築造時期も6世紀後半代と考えられる。分布のあり方など前者とは異なる系譜を持つ新興階層の墳墓群と考えられている。

\*1 本稿全体の専用地において発掘調査が行われ、調査報告書が発行されている。このため、本章については同書において詳細に記載されているので記述を軽略化する。



1. 施永古墳群 2. 鮎永古墳群 3. 飯氏古墳群B群14号墳 4. 飯氏古墳群B群 5. 丸山山古墳  
 6. 山ノ鼻1号墳 7. 山ノ鼻2号墳 8. 若八幡宮古墳 9. 下引地古墳 10. 下谷古墳 11. 大塙古墳  
 12. 女原古墳群 13. 新開古墳群 14. 谷上古墳群 15. 相原古墳群 16. 本村古墳群 17. 焼山古墳群  
 18. 油阪古墳群B群 19. 鶴先古墳 20. 鶴先古墳群A群 21. 長塙山古墳群 22. 草場古墳群  
 23. 広石南古墳群A群 24. 草刈古墳群 25. 高崎古墳群 26. 広石古墳群 27. 笠間谷古墳群 28. 野方古墳群  
 29. 野方勅進古墳群 30. 羽根戸古墳群 31. 羽根戸南古墳群 32. 敦盛古墳群 33. 金武古墳群

Fig. 2 調査地周辺古墳分布図(1/25,000)

徳永古墳群第4次

5

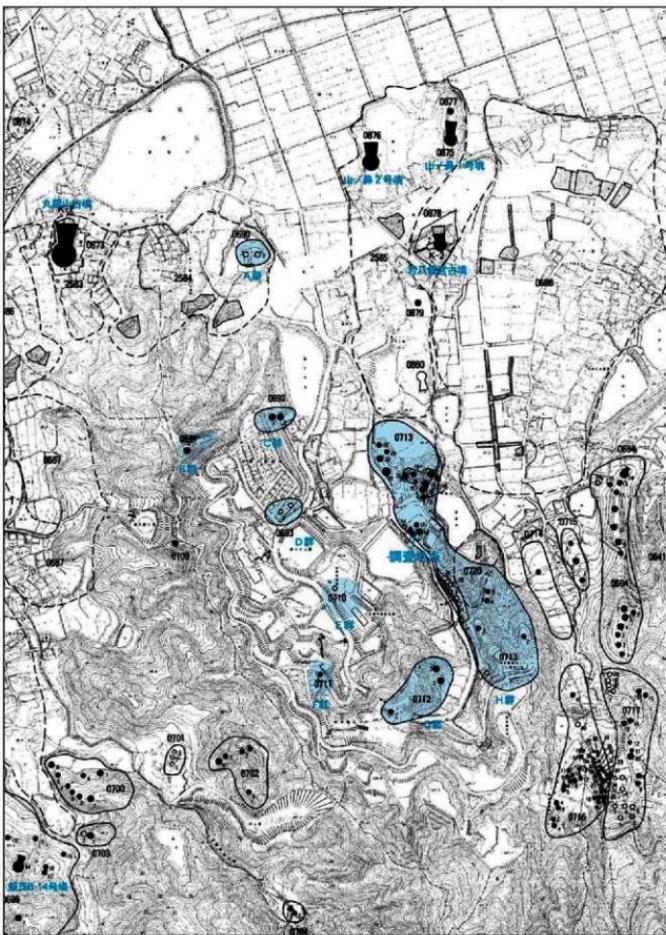


Fig. 3 徳永古墳群分布図 (1/8,000)

### 第三章 調査の記録

#### 1. 位置と現状

調査地は、背振山系の高祖山から北へ八つ手状に延びる丘陵尾根筋の中程に位置する緩斜面地で、標高52mを割る。調査地の中央に11号西辺に13号の2基の円墳が残存し、古墳以外の範囲には多くの果樹が植栽されて既に畑地の様相を呈している。調査地の西および北側は里道建設や開墾により大規模に開削されている。調査地に南接する地には2基の円墳（10号・12号）が残存し、尾根筋上を南から10号・12号・13号墳が直線的に並んで築かれている。これら3基の古墳はいずれも道路建設の際に古墳の西半部が破壊されている。11号墳は尾根筋からやや東側へずれた位置にあり、平面形が円形の墳丘形状は遺すものの頂部は深く陥没して古墳主体部が採石のために築造時の状態ではないことを物語っていた。

#### 2. 調査の概要

発掘調査は、2002年(平成14年)6月14日によて着手、同年8月29日に調査を終了した。検出した遺構は、横穴式石室を主体部とする円墳(11号墳)を1基、主体部が破壊欠失している円墳(13号墳)を1基の計2基である。調査原因の開墾が申請地全面であったことから、古墳周辺における遺構の確認調査も行ったが古墳以外の遺構を発見することはできなかった。調査中に墳丘土中から縄文時代遺物の出土をみたことから留意して墳丘土を精査した結果、調査地において縄文時代に生活が営まれていたことが明らかとなった。

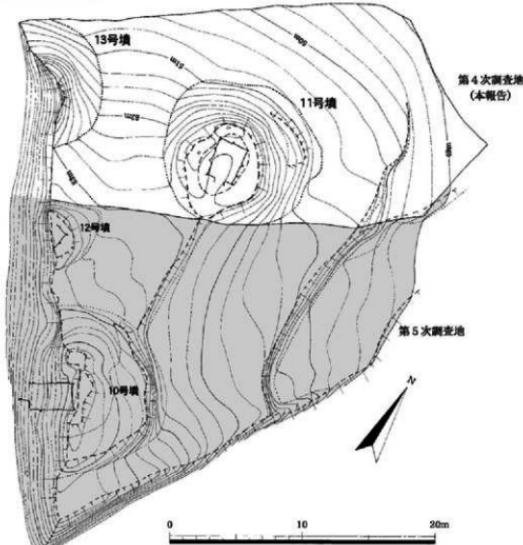


Fig. 4 調査地周辺地形図(1/300)

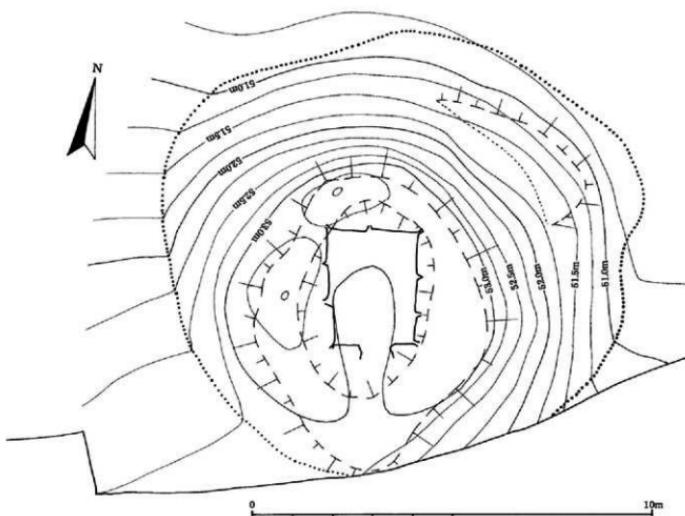


Fig. 5 11号墳現況地形図(1/100)

### 3. 11号墳の造構と遺物

#### (1) 位置と現状

11号墳は、北方へ延びる舌状丘陵の鞍部上に築造され、残存確認数27基の円墳からなる徳永古墳群において中程に位置する。墳丘は、後世の採石により墳頂部が大きく陥没しているが幸うじて築造時の姿を残しており、裁頭円錐形の形状を呈している。墳丘の東側裾部において積石の小石が露出していた。残存する墳丘は2mほどの高まりを示し、草木に覆われていた。

#### (2) 地山整形

本墳は丘陵尾根筋に直行する位置関係、すなわち斜面等高線にほぼ直行して石室を築造している。したがって、古墳築造のための地山成形は丘陵斜面側の掘削と墳丘基底面の整地という作業からなる。斜面側の掘削は、古墳が丘陵尾根筋より僅かに東側斜面に位置することから、通常は尾根筋を切断する工法が斜面を鑿穴状に地山を削り出す工法となっている。このため、削り出した地山の地形は、古墳の北方から南北方向を呈するが他の方向からはこの限りではない。周溝の掘削は現況においては明確な痕跡を確認することができなかった。後世の開削による消滅も考えられるが、後述する外縁列石との位置関係からも当初から備えていなかったと推定される。しかし、古墳が築造された位置が丘陵斜面地であることを考えると、古墳が小規模ではあるものの築造に伴う墳丘基底面の削り出しが大規模な地山成形であることに変わりはない。

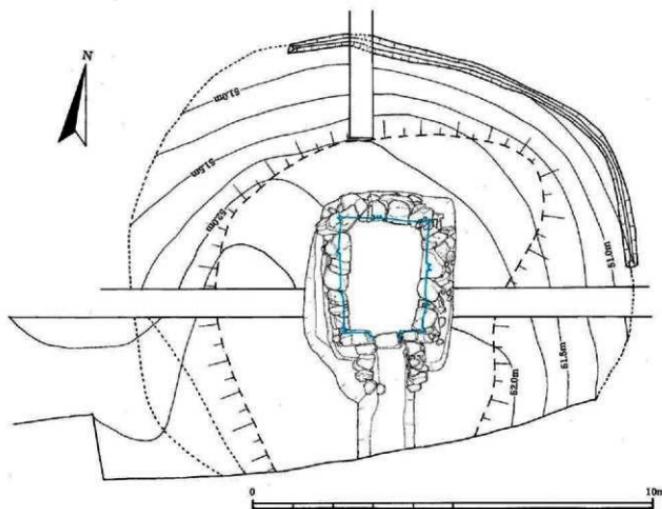


Fig. 6 11号墳地山整形図(1/100)

### (3) 墳丘

本墳は、墳丘頂部の一部を欠失しているものの周辺に所在する古墳と比べて最も削平を受けた度合いが低く、現況は築造時の姿を良好な状態で残存していると言える。したがって、残存する墳丘から築造時の規模・築造技法を十分に復元することは可能である。墳丘の残存高は、基底面から1.3～1.4m、玄室床面から1.8～1.9m。墳丘裾部の地表面からは西部で1.9m、北部2.5mをそれぞれ測る。墳丘規模はトレンチにおける封土の状況から、直径12～13m・墳高3.5～4mの規模が想定される。墳丘の封土は第一義的には古墳の外形を形成するものであるが、性格的には壁石の安定を目的とするものと墳丘の形成を目的するものとに大別される。本墳においても同様な事例が認められ、壁石の安定を目的とする封土もほぼ古墳基底面を境にして二つに区分される。すなわち、古墳基底面より低い部分である石室掘方内における壁石（腰石）の裏込めの場合は、深さ0.4～0.6mに蒙って黄灰色粘質土等を連続して突き固めている。これに対して古墳基底面より上部の墳丘、すなわち石室掘方内における壁石（腰石）は、Fig. 8に示すように層厚10数cm程を測る封土が確然と置かれて形成されている。この墳丘封土の異なりは、石室の腰石を安定させることに力が注がれていますことを示すと共に、古墳築造のポイントが腰石の据え付けにあることを示していると言える。

墳丘土層状況から石室の石積み工程がおよそ2段の石積みを一単位にして墳丘土を積み上げて石室を完成させると併に墳丘の外観を形成していることが明らかである。

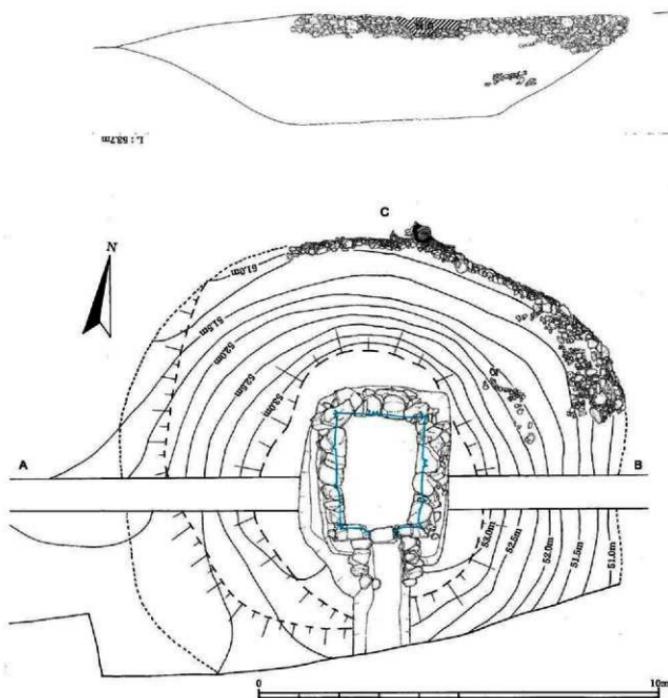
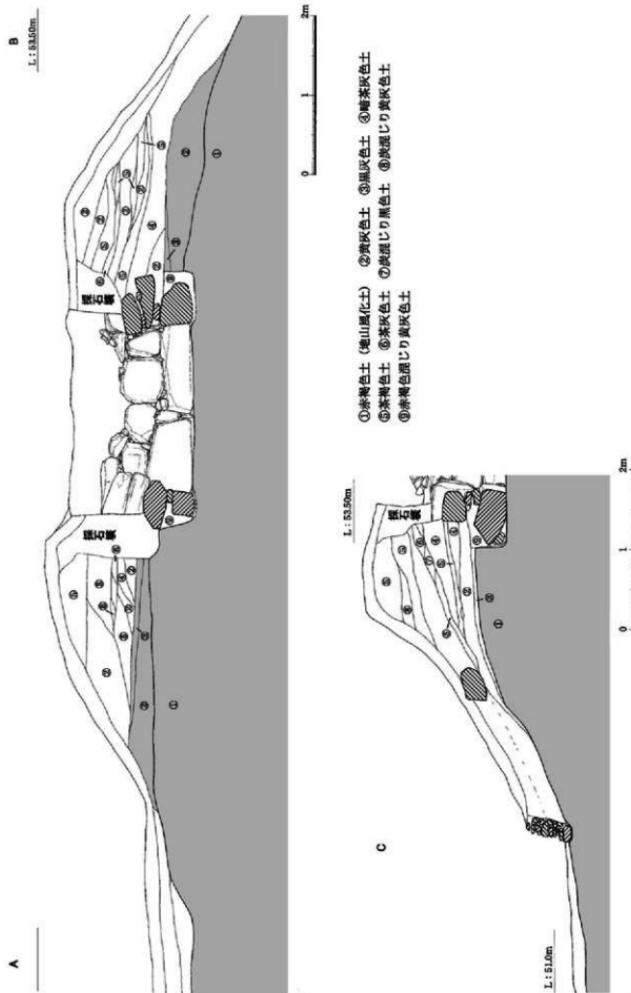


Fig. 7 11号墳墳丘遠景図(1/100)



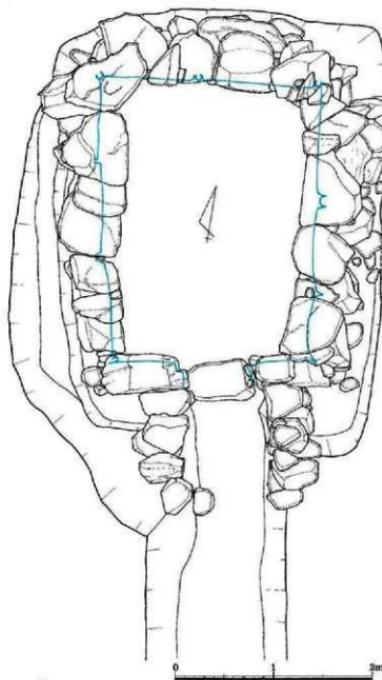


Fig. 9 11号墳石室俯瞰図(1/40)

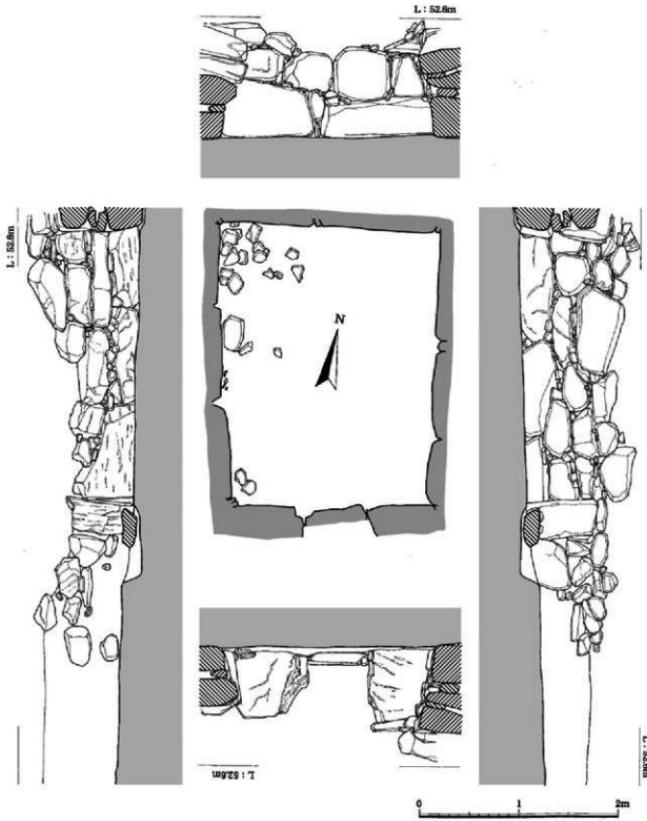


Fig. 10 11号墳石室実測図(1/40)

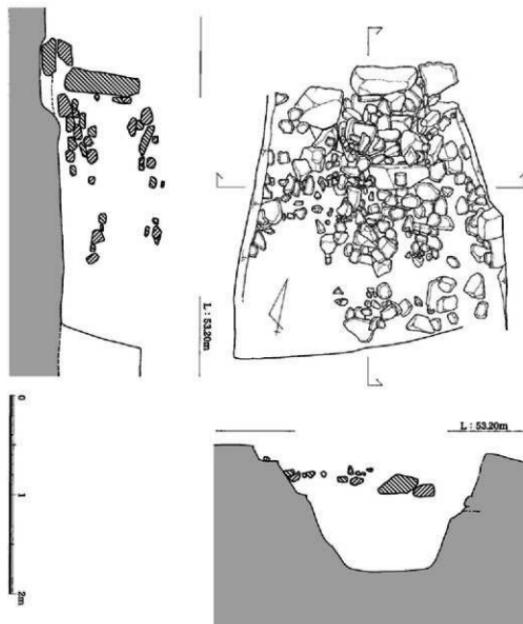


Fig. 11 11号墳附基施設実測図(1/40)

#### (4) 外護列石

墳丘の北東側部周縁においては長さ10.5mにわたって外護列石が残っている。外護列石の石積み高は最大部60cmを測る。石積みの手順は、墳丘土盛り工程が完了した後、①石積みを施す墳丘北東部周縁の範囲に位置する墳丘盛土を垂直に立ち切る。②石積みを施す位置に幅20~25cm・深さ10cmの規模で溝状に地山を掘削して石積みの基礎部を設ける。この施工は、墳丘の土圧による石積みの崩壊を防ぐために基礎（石）部の滑り防止を目的としたものであろう。③基礎石となる大振りの石を溝状内に小口積みして外護列石の基礎部を設ける。④基礎石の上に5cm×5cm~35cm×35cmを測る転石を法面が傾斜角80°~85°程度に野面積みし、石積みと垂直に立ち上がる墳丘壁面との間に裏込め材の小石を充填する。墳丘東端部では、墳丘掘から立ち上がる外護列石に連続して葺石状に石積（石敷）きが部分的に残っている。築造時に外護列石が設けられた範囲は、西端部分が築造時の状況を残しているものの東端部では現状よりさらに南側まで掘いていた可能性が考えられる。この11号墳における外護列石の存在理由は墳丘の崩壊を防ぐことを第一義的目的としつつ、副次的には装飾的效果も狙っていたと考えられる。

#### (4) 横穴式石室

本墳の主体部は、玄室主軸を約10°30'磁北より西に偏し、南方向に開口、單室の両袖形横穴式石室である。石室は後世の採石により天井部を欠失し、保存状態は良好とは言えない。調査では玄室、羨道及び羨道閉塞施設を検出した。玄室は流土・落石によって埋没し、玄室に至っては盃割を受けて床面の敷石に至るほどの擾乱を受けていた。石室は長方形プランの玄室と主軸を玄室と同じくする羨道との連接からなり、深い掘方内に築造されている。石室全長は、右側壁で4.2m、左側壁で4.4mを測る。玄室と羨道とを面す玄門部には1石の襯石が配されている。羨道閉塞施設は羨道前半部に位置する。

##### A. 石室掘方

石室掘方は、ほぼ垂直に掘削が行われ、深さ0.5mを測る。平面形は長方形を呈し、幅3.3m、長さ4.4mを測る。掘方の底、すなわち墓壁基底面の壁際には、幅35~60cm、深さ10cm前後を測る溝状の凹みを巡らしている。これは石室の腰石を安定して据え付けるために掘削したものと考えられる。

##### B. 玄 室

玄室は、奥壁幅2.2m、前幅1.95m、左壁長2.85m、右壁長2.72mを測り、羽子板状の平面形を呈する。奥壁は1.0m×0.45m、1.2m×0.6mの転石を2個、両壁は0.6~1.2m×0.4~0.5m前後の転石を3個づつ配して腰石としている。腰石の大きさは他の部位用いられた石と比べて際立った違いを見せない。腰石は石室掘方基底面の壁沿いに掘られて溝状の凹みに据え付けている。天井部が欠失している玄室構築の石積みは、奥壁は3段、左右の両壁は4段が残存する。石積み方法、すなわち石の使い方は、腰石を含む下段では広口積み、中段では横口積みもしくは小口積みが用いられ、総じて石積みの目地は直線を成していない。玄門の幅は63cmと狭く、使用されている袖石も高さ80cmの小振りの石である。玄門の両袖石の間に据えている襯石は、幅40cm×長さ70cm×厚さ15cmを測る扁平石である。玄室床面の左奥壁側には15cm×15cmほどの扁平石が10石が集中している。石敷きの一部である可能性が強いが、採石時に詰め石が落下した可能性も否定できない。

##### C. 羨 道

天井石は残存しない。側壁は右側壁長1.2m、左側壁長1.4mが残存し、壁高は0.8mを測る。幅は玄門近くで0.8mを測る。残存する壁の石積みに腰石に相当するものは認められず、壁に貼り付けた

様な状況である。このため、残存する状態で天井石を設置した場合には構造的にも耐えられない事は明らかであることから、築造段階から墓道部に天井石は設けられていなかった可能性が極めて高い。さらに、構造から11号墳は、墓道部が簡略化され、玄室から直接に前庭部・墓道に達なる形態であったと考えるのが妥当であろう。このような形態の出現は特異なものではなく、6世紀後半以降に見られる新たな被葬者群の出現と関係するものであろう。

#### D. 閉塞施設

幅67cm×高さ76cm×厚さ21cmを測る一枚の板石を玄門袖石間に据えた権石上に立てて玄室を閉鎖している。立石の外側における施工方法は、閉塞の板石から手前1.5mにわたって拳大ほどの石を40cmほど積み上げ、その上部は礫土と石とが混在した状況で閉塞している。残存する玄門部袖石上に天井石が設置されていた場合でも、閉塞に用いた板石の大きさと玄門部の高さには若干の違いが存在していることから、板石だけで完全に密封していたとは理解しがたい。

#### E. 墓道

墓道は、古墳に南接する調査区外へ延びており、その全容を知ることはできない。しかしながら、石室から南方に向直線的に伸びるようU字状に開削された溝状の前底部の状況や現況地形から判断すると、南方に向延びる墓道は途中から東側に屈曲している可能性が高い。周辺の古墳においては11号墳を除くすべての古墳が西方に向開口していることから、墓道部分は欠失して不明ではあるものの西側の谷部に向かう墓道が設けられていた可能性が高い。このため、11号墳だけが南方に向石室が開口している点は、単に古墳築造位置の制約に起因するとは考えられない。

#### (5) 出土遺物

遺物は古墳築造に関係する物とその他の時代とに分かれ、その出土量は極めて少ない。古墳築造期の遺物は、玄室内からガラス玉・鉄鑿、墓道から須恵器の短頸壺・高杯・扁壺、墳丘から須恵器片、墳丘周辺から須恵器平瓶がそれぞれ出土している。古墳築造前の遺物は、墳丘封土から鰐文土器・黒曜石製石鎧・磨製石斧・打製石斧状石器等が出土している。

#### A. 須恵器

短頸壺の7は底部を欠失する。半球形の下半部はヘラ削りによる整形。口縁部は先細り気味に直に立ち上がり、端部はヨコナデにより尖り気味である。胎土は、外面が暗青灰色、内部はセビア色を呈し、0.5~2cmほどの長石砂粒を多く含む。復元される脚部最大径は10.4cm、口径は8.4cm。平瓶の11は底部径9~9.5cm、脚部最大径15cm、復元口径7.5cm、復元器高12cmを測る。脚部は扁平な球状を呈し、カキ目により整形している。口縁は外反気味に直線的に立ち上がる。胎土は、外面が暗青灰色、内部はセビア色を呈し、0.5~1cmほどの長石砂粒を含む。扁壺の4は扁平な脚部の大半を欠失する。成形は捏ねと同じくし、成形のカキ目をナデ消している。胎土は、外面が灰色、内部はセビア色を呈し、0.5~2cmほどの長石砂粒を多く含む。5は高杯の杯部、6は脚部の破片で、同一個体片と思われる。口縁は外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。脚部には三ヶ所に透かしを施し、杯部との接合は少量の粘土を接合部に巻き付けている。胎土はいずれも外面が灰色、内部はセビア色を呈し、0.5~1cmほどの長石砂粒を多く含む。杯の2は底部を欠失する。体部は底が浅い。口縁はやや内傾しながら直線的に立ち上がり、端部はヨコナデで丸く仕上げている。外面の底部近くだけヘラ削り整形している。胎土は、外面が暗青灰色、内部はセビア色を呈し、0.5mmほどの長石砂粒を僅かにむ。復元される口径は11.2cm。

### B. 鉄 器

鉄製品は玄室内から鉄鏃及びその破片が出土している。

80001の鎌身は小さく鋭く、鍔被幅より僅かに大きい膨らみをもつ柳葉形である。鎌身の全長2.6cm、幅1.1cmを測る。長い鎌被の断面形は央部が長方形で基部近くが方形を呈する。

### C. ガラス製品

玄室内床面から、ガラス製の丸玉が1点出土している。

70009は径8cmを測るガラス製の丸玉で、深い藍色を呈している。

### D. 石 器

墳丘及びその周辺からは古墳の築造及び祭祀に関係しない遺物である石鏃や石斧状石器、さらには黒曜石の石刃や剥片が數多く出土している。

#### 石 鏃

石鏃は3点出土している。70008は尖頭部を欠く、サスカイト製の無茎石鏃である。残存長2.5cm、最大幅1.6cm、厚味0.5cm。70004は黒曜石製で、上半部を欠く。残存長1.9cm、最大幅2.1cm、厚味0.4cm。70007はほぼ完形の黒曜石製無茎石鏃で、極めて丁寧な造りである。全長3.7cm、最大幅1.6cm、厚味0.7cm。70005は黒曜石の縦長剥片を素材とした石刃。一部に原石面を残し、対する縁に加工を試みた痕跡を残す。70003は黒曜石の縦長剥片。素材は極めて透明感がある。黒曜石すべて腰産のものである。

#### 石 斧

70002は今山産の太型始刃磨製石斧片である。刃部近くの破片で、使用の際に器面が剥離したものである。

#### 石斧状石器（起耕具）

70001は全長13.7cm、最大幅6.3cm、最大厚2.1cmを測る打製石斧状の石器である。器面の風化が激しい。刃部は薄く1.2~0.8cmを測るが基部側は厚く、全体的に反りを呈する。基部の側面には明瞭な抉状の凹みがある。形態的には石斧状を呈するが、起耕具の可能性が高いと考えられる。

#### 石 刀

70005は全長4.3cm・最大幅1.8cmを測る黒曜石の縦長剥片で、片側面に原石面を残す。他方の側面には長さ1.2cmを測る使用痕跡が認められる。70003は全長3.4cm・最大幅1.8cmを測る黒曜石の縦長剥片である。片方の側面には長さ1.5cmを測る使用痕跡が認められる。

### E. 鑽文土器

變形土器の破片が3点出土している。1点は口縁部近く、他は胴部であり、同一個体の可能性が高い。内面に条文を残し、口縁部下に造られた凸部に縦方向の割目を施す。

## 4. 13号墳の遺構と遺物

13号墳は11号墳の西15mに位置する古墳で、主体部をはじめ古墳の大半が道路建設時に失している。現況は円墳を想定させる程度の墳丘一部だけが残存し、石室の主体部構造や規模は不明である。調査では現況地形測量と墳丘土層断面の観察にとどめた。遺物などは出土していない。

科学的根拠を全く有しない状況下ではあるが、13号墳の築造年代は越後古墳群H群の造営時期の範囲に入るものと思われる。



Fig. 12 11号墳道部出土遺物実測図(1/3)

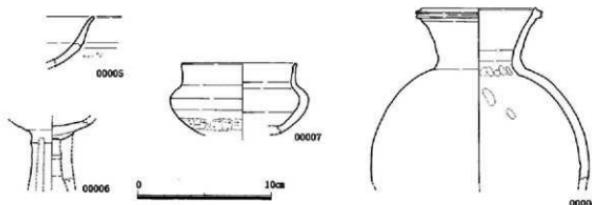


Fig. 13 11号墳丘出土遺物実測図(1/3)

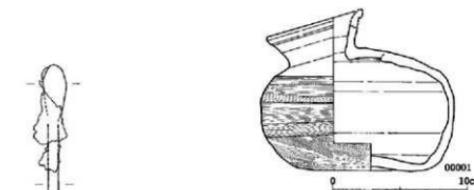


Fig. 14 11号墳丘部出土遺物実測図(1/3)



Fig. 15 11号墳石室内出土遺物実測図(1/2)

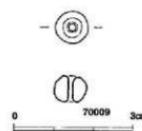
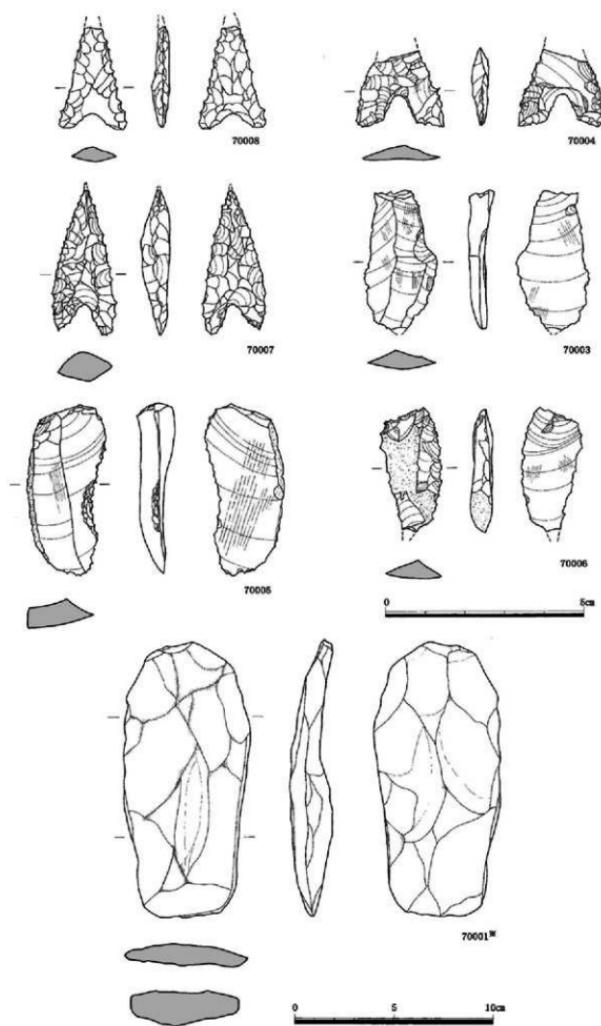


Fig. 16 11号墳丘出土遺物実測図(1/1)

Fig. 17 11号墳墳丘出土石器実測図(1/1 · 1/2<sup>nd</sup>)

## 第IV章 小 結

本調査におけるいくつかの問題点を列記し、今後の周辺調査における結果を待ちたい。

### 古墳時代の遺構

今回調査を行った徳永古墳群H群の11号墳は、両袖式单室の横穴式石室を主体部とし、墳径12～13m・墳高3.5～4mの規模が推定される円墳であった。詳細な石室の規模や追葬回数などについては後世の破壊などにより不明であるが、古墳の築造時期は閉塞施設出土の供獻土器などから6世紀後半期と想定される。絶対的な根拠を有しているわけではないが、古墳の築造時における被葬者の生活基盤は古墳が立地する丘陵東側の谷地形に開かれた女原地域にあると推定される。その理由として、11号墳の外構施設の状況が挙げられる。同古墳における外護列石の石積み範囲は墳丘全体に施されているわけではなく、墳丘の東半分に限定されている。11号墳の外護列石範囲が尾根の傾斜及び地盤などの関係から墳丘土圧の影響を強く受ける範囲と重なっていることから、外護列石の存在意義が墳丘土の保全確保を第一義的とすることは明らかである。さらに、意識的かどうかは不明であるが、外護列石の副次的産物として、墳丘の視覚効果を高めることとなる。この点を最も理解できる範囲は、古墳の立地関係や施工範囲から、先に述べた古墳東側に広がる女原地域に限られるのである。11号墳の南に位置する10号墳においても墳丘に同様な施工が行われていることから、外護列石が少ない労力と資材により古墳の視覚効果、すなわち被葬者の埋葬以降の存在感を強く示すために行われたと考えられる。

### 縄文時代の遺構

先述したように11号墳の墳丘土内からは古墳築造前代の所産である縄文時代後期の斐形土器、石鏃などが出土しているが、特に注目すべき点は黒曜石の大小の剥片が48点出土していることである。墳丘造成土は古墳が立地する丘陵、それも古墳周辺の掘削した土を用いていたと考えると、形状が異なる剥片も含まれた剥片が集中的に出土している事実は、11号墳の立地する丘陵上に縄文時代の住居が存在していた事を強く示唆するものと考える。周辺地における縄文時代の生活に関する存在は、本調査地に南接する第5次調査においても黒曜石を含めた同時期の関連遺物の出土報告が成されていない。このため、出土資料が示す遺構は、定置的かつ長期的集落では無く、11号墳を中心とした極めて狭小な範囲に短期間存在したことを示すものである。

11号墳の所在する丘陵における縄文時代の様相については今後の周辺調査に期したいところだが、同丘陵の大半は既に畑地造成や土取り等の開発行為により往時の景観を残していないことから極めて絶望的である。このため、周辺丘陵などの調査時には、この点を留意しながら行う必要があろう。

# 図 版



第11号墳調査風景(南から)

施永古墳群第4次

PL. 1



調査地周辺航空写真(撮影:1975年 昭和50年)



調査地周辺航空写真(撮影: 2001年 平成13年)

他永古墳群第4次

PL. 3



(1) 11号墳調査前全景（北から）



(2) 11号墳墳丘遺存状況（北から）



(3) 11号墳墳丘除去後全景（北から）



(1) 11号墳墳丘北区遺存状況（西から）



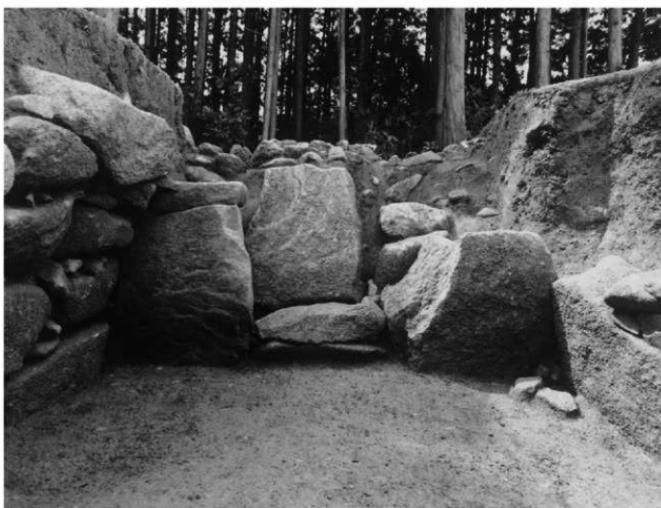
(2) 11号墳墳丘西区遺存状況（南から）



(3) 11号墳墳丘東区遺存状況（南から）

徳永古墳群第4次

PL. 5



(1) 11号墳玄門部閉塞状況（北から）



(2) 11号墳玄門部閉塞状況（西から）



(1) 11号墳堵道上部閉塞状況（南から）



(2) 11号墳堵道下部閉塞状況（南から）



(3) 11号墳堵道部全景（南から）



(1) 11号墳主体部完掘状況（南から）



(2) 11号墳主体部完掘状況（西から）



(3) 11号墳主体部完掘状況（東から）



(4) 11号墳主体部完掘状況（北から）



(1) 11号墳玄室全景(南から)



(2) 11号墳玄室奥壁残存状況(南から)



(3) 11号墳玄室玄門残存状況(北から)



(4) 11号墳西側壁北半部残存状況(東から)



(5) 11号墳西側壁南半部残存状況(東から)



(6) 11号墳東側壁北半部残存状況(西から)



(7) 11号墳東側壁南半部残存状況(西から)

徳永古墳群第4次

PL. 9



(1) 11号墳墳丘外縁石積断面状況（西から）



(3) 11号墳墳丘北区外縁石積遺存状況（北から）



(2) 11号墳墳丘北区外縁石積遺存状況（北から）



(5) 11号墳墳丘東区外縁石積遺存状況（東から）



(4) 11号墳墳丘東区外縁石積遺存状況（東から）



(7) 11号墳墳丘東区外縁石積遺存状況（東から）



(6) 11号墳墳丘東区外縁石積遺存状況（東から）

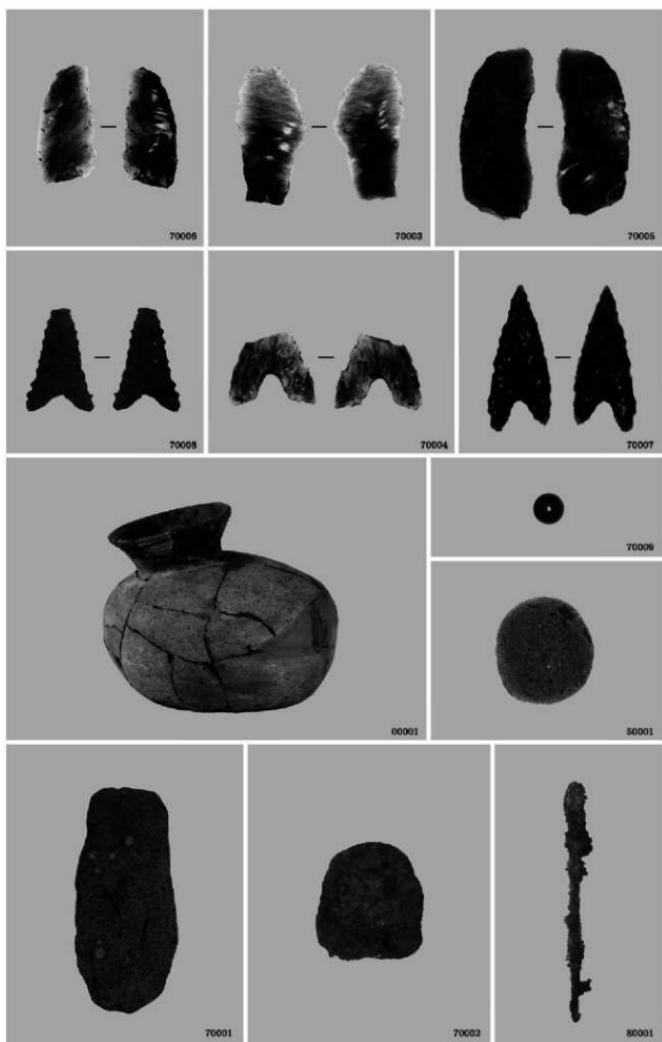


(1) 11号墳墳丘外縁石積基礎部遺存状況（東から）



(2) 11号墳墳丘外縁石積基礎部遺存状況（東から）

PL. 11



11号填出土遗物

## 報告書抄録

書名ふりがな	とくがにふんぐん ご	
書名	徳永古墳群 5	
副書名	徳永古墳群H群第4次調査報告書	
巻次	5	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書	
シリーズ番号	第1020集	
調査者名	瀧本正志	
著者名	瀧本正志	
調査機関	福岡市教育委員会（埋蔵文化財第2課）	
発行機関	福岡市教育委員会	
調査所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号	
発行年月日	20080317	
遺跡名ふりがな		
遺跡名	徳永古墳群	北緯(日本測地系) 333356
所在地ふりがな	ふくおかけんふくおかしにくおかざとくながあざあらた	東経(日本測地系) 1301543
遺跡所在地	福岡県福岡市西区大字徳永字アラタ384-19,384-41	北緯(世界測地系) 333407
市町村コード	40130	東経(世界測地系) 1301535
遺跡番号	20713	調査期間 20020614～20020829
調査原因	調査面積 249m <sup>2</sup>	
種別	墳墓	
主な時代	縄文時代・古墳時代	
主な遺構	古墳2基（円墳）	
主な遺物	須恵器・鉄鏃・石斧・石鏃・縄文土器	
特記事項	古墳時代後期に属する群集塚2基。縄文時代の集落の存在をうかがわせる出土品	

### 徳永古墳群 5

－徳永古墳群H群第4次調査報告書－  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1020集

編集・発行 福岡市教育委員会  
 福岡市中央区天神1-8-1  
 TEL.092(711)4667  
 発行日 平成20年(2008)3月17日  
 印刷 有限会社 吉村総合印刷  
 福岡市博多区博多駅前2-3-23

# TOKUNAGA KOFUN 5

THE REPORT OF THE 4TH ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS  
GROUP-H OF THE TOKUNAGA TUMULUS CLUSTER  
IN FUKUOKA, JAPAN

March 2008

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY